ISSN 1884-7722

ちひろ美術館・東京
美術館だより

No.196
2017.2.20

40th ANNIVERSARY 20th
TOKYO・AZUMINO

開館40周年記念Ⅰ　日本・デンマーク国交樹立150周年
ちひろと世界の絵本画家コレクション　わたしのアンデルセン

●2017年3月1日(水)～5月14日(日)

主催：ちひろ美術館
後援：デンマーク大使館

創作童話の祖として知られるデンマークの作家ハンス・クリスチャン・アンデルセン（1805～1875）。彼の童話は約160言語に翻訳され、時代も国境も超えて世界中の人々に読み継がれています。世界各国の画家たちがアンデルセンの童話を絵にしようと取り組み、日本でも明治期に紹介されて以来、多くの画家たちが絵を描いてきました。

いわさきちひろは、日本でも有数のアンデルセンの描き手です。アンデルセンの世界に魅せられ、登場人物や異国の情景に工夫を凝らして描いたその作品群は、現存するものだけでも約850点を数え、子どもを描いた絵とはまた異なる画業の一端を形づくっています。

本展では、初期から晩年までのちひろのアンデルセンに関連する作品を紹介するほか、国内外の絵本画家たちが描いた作品の数々も展示します。

ちひろのアンデルセン

ちひろが最初にアンデルセンの童話を手がけたのは、第二次世界大戦終結からまだ間もない1947年、「お母さんの話」の紙芝居でした。前年に疎開先の信州から東京に戻り、新聞記者として働きながらカットなどを描いていたちひろにとって、この仕事は画家として自立する大きなきっかけとなりました。

図1　いわさきちひろ　死神を追いかける母親
紙芝居『お母さんの話』習作　1947年

ちひろは紙芝居や童話集、絵本、油彩画などに、毎年のようにアンデルセンの童話を描いています。156編の彼の童話のなかで、わかっているだけでも34編に絵を描いており、「マッチ売りの少女」（8回）「親指姫」（7回）「人魚姫」「赤い靴」（各6回）など、繰り返し描いている童話もあります。ちひろはアンデルセンへの思いを次のように語っています。

「『マッチ売りの少女』とか、いろいろなおひめさま、また魔女たちに、わたしは、それぞれのイメージをつくり、それをすこしずつ発展させながら、なんかいかいたことだろう。なんかいかいても、なお工夫するたのしさを、わたしはいまだに失なわないでいる。百年もの年代の差をこえて、わたしの心に、かわらないうつくしさをなげかけてくれるアンデルセン――。むかしふうの文章なのだけれど、その中にいまの社会につうじる、同じ庶民の悲しさをうたいあげているこの作家に、わたしは、ずいぶん学ぶことが多い。(1964年)」*1

図2　マッチをともす少女
『マッチうりの少女』（偕成社）より　1964年

ちひろが愛したアンデルセンの作品に、33編の連作短編集「絵のない絵本」があります。月が夜ごと屋根裏部屋に住む絵描きの青年のもとを訪れて語ったとする「人の世の悲しみや真実」が書かれたこの物語を、ちひろはいつか絵本にしたいと望みました。

まだ海外旅行の珍しかった1966年３月下旬から１か月あまり、47歳のちひろは「絵のない絵本」の取材のために、母を伴ってヨーロッパをめぐる画家たちのツアーに参加します。この旅の途中、ちひろは仲間たちと別れて母と二人、アンデルセンの生まれ故郷であるデンマークのオーデンセを訪れました。アンデルセン博物館の一隅には、最貧街にあったという彼の生家が残され、周囲の街並みも保存されています。「なにからなにまで見なければ描けないなんてことはないけれど、じかにこの目で見、ふれることのできる感動がどんなにわたくしを力強く仕事に立ち向かっていけるようにするかということをかみしめていました。(1967年)」*2と、後にちひろはこの旅を振り返っています。帰国後に、“若い人の絵本”という新たな企画で描かれた『絵のない絵本』や、アンデルセンの自伝を絵本にした『わたしの少年のころ　アンデルセンものがたり』などには、物語の奥にあるアンデルセンの人生や、その感性を育んだ土地を知ったからこそ表現できるリアリティが感じられます。

図3　オーデンセ　アンデルセンの生家　1966年３月30日

図4　玉座で死んだ少年　『絵のない絵本』(童心社)より　1966年

世界の絵本画家たちのアンデルセン

ちひろ美術館コレクションのなかには、ちひろ以外にも、国内外の絵本画家たちが多種多様な解釈と表現で描いたアンデルセン童話の絵が含まれています。

初山滋は、大正期からアンデルセンの童話の絵を手がけ、日本におけるアンデルセンのイメージを作り上げてきた画家のひとりです。子どものころに着物の模様画工房で奉公し、日本の装飾美を体得していた初山は、アンデルセン童話の幻想性を、抽象的な線や形象を用いて、繊細、華麗に描き出しました。特に『にんぎょひめ』にみる海底の世界は秀逸です。

図5　初山滋　『にんぎょひめ』より　1967年

チェコのアーティスト、パツォウスカーは『すずの兵隊』を限定版のリトグラフの絵本として制作しました。絵本を視覚芸術のひとつと考える彼女の作品は、アンデルセン童話から得たインスピレーションをもとに、新たな造形を生み出しています。

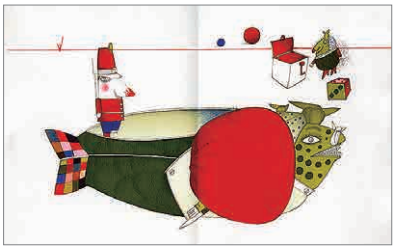


図6　クヴィエタ・パツォウスカー（チェコ）
『すずの兵隊』より　1985年

貧しい靴職人の子として生まれ、苦難や挫折を味わいながらも、強い向上心と持ち前の無邪気さで、どこまでも希望をもって人生を切り開き、世界的な作家となったアンデルセン。今も多くの画家たちの心をとらえてやまない、アンデルセンの世界をご覧ください。（上島史子）

＊1「童画とわたし」「なかよしだより」（講談社）より
＊2「アンデルセンの故郷オーデンセ」「ロマンツアー音楽世界めぐり１＝北欧」（千趣会）より

開館40周年記念Ⅰ　日本・デンマーク国交樹立150周年
デンマークの心　イブ・スパング・オルセンの絵本

●2017年3月1日(水)～5月14日(日)

主催：ちひろ美術館、メディアリンクス・ジャパン
後援：デンマーク大使館、こどもの本WAVE、絵本学会、(公社)全国学校図書館協議会、(一社)日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、(公社)日本図書館協会、杉並区教育委員会、中野区、西東京市教育委員会、練馬区
協賛：瞬報社写真印刷株式会社

デンマークの国民的画家　オルセン

2017年の日本・デンマーク国交樹立150周年を記念して、デンマークを代表する画家イブ・スパング・オルセンの展覧会を開催します。オルセンの展覧会は、ちひろ美術館開館15周年（1992年）の「オルセンの描いたアンデルセン展」以来25年ぶりであり、まとまった数の原画をデンマークから借用して日本で展示するのは初めてのことです。

イブ・スパング・オルセン（1989年頃）
Photo © Tamotsu Hozumi

オルセンの故郷デンマークのコペンハーゲンでは、2015年11月から2016年１月まで「イブ・スパング・オルセン　手の仕事、魂の仕事」展が開催され、2012年に亡くなった彼の仕事の全容を原画や資料から垣間見ることができました。オルセンは、生涯で600冊近い本に絵を描き、デンマークでは、誰もがオルセンの絵を使った本でＡＢＣを学んでいるといわれるほど身近な存在です。また、本の装丁やアニメーション、ポスターの分野で幅広い活躍をし、グラフィックデザイナーとしても知られています。本展では、デンマークで展示されたもののなかから、絵本関連作品を中心に、12冊の絵本のための原画や資料などを紹介します。

1921年に３人兄弟の末っ子として、コペンハーゲンのオステルブロ地区に生まれたオルセンは、王立美術大学でグラフィックアートを学び、教職に就きました。21歳で新聞のための挿絵を描き始め、23歳で、最初の本のイラストレーションを描きます。以後さまざまな分野で、あらゆる年齢層のために描き続けたオルセンについて、「オルセンが、この70年の間に果たしたデンマーク文化への貢献はあまりにも大きいため、当たり前に思われ、見逃がしてしまいがちだ。」と、デンマークの詩人ソーレン・ウルリク・トムセンは語っています。

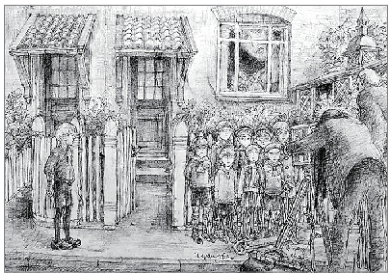


図１　『オステルブロからきた男の子』より　1980年

オルセンとアンデルセン

デンマークといえば、アンデルセンの名前がまず挙げられますが、国際アンデルセン賞画家賞をデンマーク人として初めて受賞したのが、オルセンでした。1972年に51歳で受賞した彼は、「アンデルセンの世界は、わたしにとっては宇宙と思えるほどに深く、広大な場所です。そこでは、人間の心の森羅万象が描かれ、ときには未来を予知しながらゆるがぬ真実が語られているのです。（中略）わたしはこれまで何度もアンデルセンの作品に立ち戻りながら歩いてきました。そしてその度に新たなものを発見して驚き、勇気づけられてきました。」＊1と語っています。

オルセンの描くアンデルセン童話やアンデルセン自伝は、決して華やかで色鮮やかな絵ではなく、独特の、震えるような線で描かれた人物の輪郭や影が人の心のひだまで表現しているようで、心をざわつかせます。

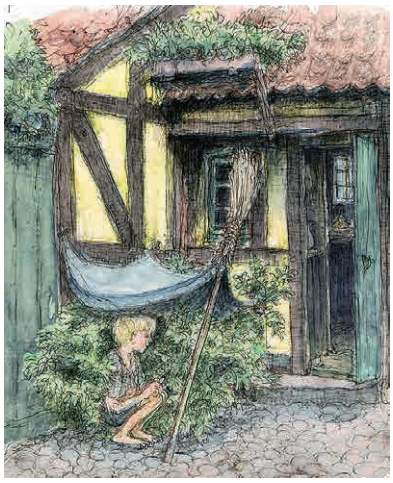


図２　『アンデルセンの童話』(福音館書店)より　1992年

さまざまな技法

この作品（図２）では、１枚のフィルムに黒い線の部分のみが描かれ、もう１枚のフィルムには彩色がほどこされ、それら２枚を重ねて１枚の絵としています。オルセンの90年代までの本にも見られる、ヘリオグラフィー＊2という技法には、彼のグラフィックアーティストとしてのこだわりがうかがえます。このため、絵本や本のイラストレーションにおいては、色よりも線の画家であることが感じられます。

多くの絵本原画には彩色がされていなかったり、カラーセパレーション（描き分け版）で本を制作していたりするために、ペンや鉛筆で描かれたモノクロの原画が多く、一見すると地味に見えますが、重なる線の表現には奥行きがあり、画家の筆致が伝わってきます。

創作絵本の魅力

オルセンの作品の魅力はアンデルセンに留まりません。文章も絵も両方手掛けた30冊あまりの創作絵本には、オルセンの詩情やユーモア、そして読者である子どもへの深い理解や愛情が感じられます。10年間の教師の経験や、40歳を過ぎ父親となったことなどが、彼の絵本づくりにも反映されています。

図３　『はしれちいさいきかんしゃ』(福音館書店)より　1963年

『はしれちいさいきかんしゃ』の主人公の機関車は小さいために遠くへ行かせてもらえず、隣の町へ行くのを夢みています。突然走り出し、一心不乱に進むようすは、あたかもやんちゃな男の子のようです。顔が描かれていなくても、煙突からはきだされる煙や、車体の下から吹き出す蒸気などによって、元気な性格を想像させるところは、オルセンの画力と言葉の力なのでしょう。

『かぜ』は、身近な風がどこから吹いてくるのかを、お姉さんのマチルドと弟のマーチンふたりが、外を歩きながら探していくお話です。自然のなかで風に逆らったり押されたりしながら歩く子どもたちの姿はシンプルにみえますが、さまざまな身体の動きが自在に描かれています。オルセンの本領は、このように気取らない、日常的な人やものを描くときに発揮されるようです。その魅力は時代も国境も超え、届いてきます。（松方路子）

図４　『かぜ』表紙（亜紀書房）　2016年

＊1『アンデルセンの童話３』(福音館書店)より　＊2リトグラフの原則を用いたオフセット印刷の一種。画家が加工したプラスチックフィルムに描いたものが、印刷面に直接写される。

2016年11月26日（土）　赤羽茂乃講演会「赤羽末吉のみた中国大陸」

赤羽末吉の三男の妻である赤羽茂乃さんの講演を一部ご紹介します。

「今日は、義父（ちち）・赤羽末吉が旧満州（現・中国東北部）でどのように暮らし、それがその後の絵本にどのようにつながっていったかをお話ししたいと思います。

義父は、13歳で養子に出され、養父と折り合いが悪かったため、家出同然の暮らしをしていました。中学卒業後、日本画の師匠に弟子入りしたり、芝居に夢中になったりしましたが、1932年、22歳のときに、大恐慌の最中の日本から満州に発つことになりました。小説家か舞台装置家か画家になりたい、という夢だけを携えて渡満した義父は、その後15年間を満州で暮らすことになりました。渡満後、大連に嫁いでいた姉の紹介で住み込みで運送会社で働き始め、－30℃の真冬の凍った道を慣れない自転車で荷を運び、友だちもなく鬱々とした日々を過ごしていました。ある日、本屋で初山滋が表紙を描いた『コドモノクニ』を見かけ、昔どこかでその絵を見たような、心に灯が灯ったような感じがして、一旦やめていた絵をまた描いてみよう、と思いたち、それからは、休みの日に中国の子どもたちのスケッチなどするようになりました。

ひょんなことから、義父は緻密さと器用さを買われ、満州電信電話株式会社という半官半民の大会社に引き抜かれました。森繁久彌や檀一雄などの文化人とも交流を深め、生き生きとした日々を送り、それが画家としての成長の糧にもなったようです。当時満州で一番権威のあった“満州国美術展覧会”で3年連続で特選賞をとり、日本画家としても認められるようになりました。賞を取ると会社の宣伝にもなるので、制作期間中は休みがもらえ、自由に絵を描くことができました。仕事は広報担当で、取材旅行にも出られるようになり、大陸の自然や文化にふれ、中国に強く惹かれていきました。特に“異常色彩の夢の秘境”と義父が呼んだ熱河（ねっか）（現・承徳（しょうとく））や、草原の広がる内モンゴルでは、大陸の広大さと悠久を知り、いつか大作が描きたい、と思うようになったのです。戦後、日本への引き揚げのとき、禁止されていたにもかかわらず、それらの写真やスケッチを命がけで持ち帰りました。51歳でデビュー作『かさじぞう』を出版した後、編集者に次は何が描きたいかと聞かれ、迷わず“モンゴルが描きたい、あの広大な大地を日本の子どもたちに見せたい”といって生まれたのが、その写真をもとに描きあげた『スーホの白い馬』です。

旧満州・新京（現・長春）の自宅にて

義父は、彩色を施した革製の人形を使って炎の前で演ずる影絵芝居や、個性あふれる郷土玩具にも夢中になり、その収集や調査には研究者的な一面をも発揮しました。後年、こういった研究が、昔話絵本を描く要因の一つになっているようだ、ともいっています。中国を題材にした絵本もたくさん描いていますが、その一冊一冊に、考証の確かさ、中国文化への造詣の深さをみることができます。そして何よりも、そこには、中国の大地とそこに暮らす人々への、義父の深い愛情が込められているように思えます。

画家・赤羽末吉を育んでくれた、愛してやまない大陸の地で一生を終えるつもりでいた義父は、敗戦後、自分は侵略者のひとりに過ぎなかった、と気づき、愕然とします。そして、中国の人々に対する自責の念と、大人でありながら戦争を止められなかった責任を一生背負い続けたのです。「二度と戦争を起こさせてはいけない。世界の子どもたちが、絵本を通じて他国の文化を理解しあうこと、それが平和を築くことに繋がる」義父の絵本には、そのような強い思いが込められています。と同時に、絵本を描くこと、絵本を描くことで子どもたちと語らうことを、存分に楽しんでいたのだと思います。渾身の力をこめて描いた絵本を、子どもたちが無造作に手に取って、心から楽しいと思ってくれる、それが赤羽末吉の一番の望みだったのではないでしょうか。」

（窪田有希子）

『スーホの白い馬』大塚勇三・再話（福音館書店）より　1967年

11月27日（日）　支援会員の日 活動報告と記念講演　海老名香葉子 平和への願い

5年目を迎えた支援会員制度、今回の報告会には支援会員をはじめ、一般の来館者も含め約80名がご参加くださいました。2015年度の活動と昨年夏にオープンした「トットちゃん広場」の映像に続き、ちひろ美術館友の会のころから会員の海老名香葉子さんに記念講演をしていただきました。その一部をご紹介します。

「私は昭和8年、東京本所の江戸和竿の職人の家に生まれました。下町情緒たっぷりで隣近所ととても仲がよく、助けたり助けられたり。兄3人と弟1人。遊びに行くときはいつも弟をおんぶして。そんな暮らしのなか、戦争がはじまりました。祖母は国防婦人会の副会長、私は軍国少女でした。戦争が激しくなり、私は沼津に疎開しました。出発の朝、母がお守りを私の首にかけてくれて、『かよちゃん、あんたは、明るくて元気で強い子だから、大丈夫よね。いつも笑顔でいるのよ』って、ぽろぽろ泣いたんです。幼い弟は自分の大事なメンコを私にくれました。そして3月10日、うちは三男の兄をのぞいて家族6人、親族18人がみんな火の海のなかで死んでしまいました。たった2時間で10万人が亡くなったんです。

空襲前のことで思い出すのはクリスマス。居間に豆電球をたくさん飾って、プレゼントは丸善の包みでした。友達も呼んで、お煮しめに豆ごはん、楽しくてうれしくて。家には本がたくさんありました。何の本を読んだのかまったく思い出せなかったんですが、子どもを持ち、絵本を読んでやっていて、あら、と思うと、たいてい母が読んでくれたものでした。『マッチ売りの少女』とか、『小公女』とか。耳から入って、心のなかにずっとあったものなんですね。親の愛がなんといっても一番です。だから私はいつも、子どもたちにも、お弟子さんたちにも、いざとなったら、私がついてるよ、と言っています。

ひとつのいのちが助かり、そのいのちに、子が生まれ、孫ができました。いのちを大切に生きなきゃいけないと、歳を重ねて、なおさらのように感じます。*」

最後に理事長の山田洋次が「こういう時間をみなさんと共有する、そのためにこそ、この美術館はあるのだし、これからも役に立つ美術館でありつづけたいと思っています。」と謝辞を述べ、閉会となりました。

（徳永美幸）

＊海老名香葉子さんは2005年に寛永寺・上野公園に慰霊碑を自費で建立され、毎年3月9日に「悲しみの東京大空襲の慰霊、時忘れじの集い」を主催。
また全国、海外にも出向かれて、東京大空襲を語り継ぎ、平和を祈る活動とともに、「平和への思い」を精力的に発信し続けています。

ひとこと ふたこと みこと

2016年10月4日（火）
近所に住んでます。自転車で月一回のペースで来館。ゆっくり館内を巡ってちひろ作品と対話するのが心の癒しになっています。（H·K）

11月5日（土）
北海道から来ました。庭がとてもすてきでした。ほとんどの花が、春に家の庭に咲く花でした。ちひろさんと好きな花が似ているのかな、と思うとうれしくなりました。（北海道のちいちゃん）

12月10日（土）
入院されていたちひろさんが、絶筆に描いたのもあかちゃんの絵と知って、子どもをテーマに長年描き続けてらした彼女らしい、と感じた。ちひろさんの絵や平和の祈りが、世界に広がり続けてほしいと願う。（Chie）

12月21日（水）
小学６年のとき初めてちひろさんの絵を知りました。出会いは担任の先生がクラスのみんなに貸してくれたトットちゃんの本。クラスのほとんどが（女子中心）読んでいました。毎年のカレンダーを飾りはじめて35年。若いころには感じ取れなかったちひろさんの思いを今日は感じ、思いを共有できました。また来ますね。（悦子）

〔「赤羽末吉・中国とモンゴルの大地」展〕

11月12日（土）
小学校のころに読んだ『スーホの白い馬』の風景が忘れられず、６年前の夏、モンゴルへと向かいました。ただただ広い草原と、信じられないほど速く走る馬たちのことは、今でもはっきりと思い出せます。そこに暮らす人々や満天の星空は、私の悩みを吹き飛ばしてくれました。この絵本がなければ、モンゴルに行くことも大きな感動を得ることもありませんでした。感謝でいっぱいです。（杉並区 K·F）

2017年1月3日（火）
1930年代から1940年代という時代に、透明な心と目をもって、モンゴルと中国の自然、風土、民族をこのような形で残された日本人がいた、ということに感動しました。アジアの歴史に残る、貴重な文化遺産だと思います。

1月14日（土）
何回も涙を流しながら読んだ『スーホの白い馬』。ゆったりと間がとられた絵により、物語の静けさ、奥深さが強く刻印されていました。赤羽さんの息づかいや思いを感じ胸が熱くなりました。（明峯惇子）

美術館日記

おつむてんてん
1971年

2016年11月6日（日）☀
展示最終日。「Kawaii・ちひろ展」の出品作品で行った「ちひろのどの絵がいちばんかわいい？」の投票第１位は、1,102票中356票獲得で「おつむてんてん」となった。選んだ理由は「９番目の孫に似ているから」（64歳女性）、「もうこんなことできるよ、といっているみたい」（８歳女の子）、など。

11月8日（水）☀
展覧会「ちひろ・冬のしつらえ」にあわせ、絵本カフェでは自家製ライ麦パン、ミートボールと根菜のシチューに、冬野菜のマリネを添えたセットメニューをスタート。

11月13日（日）☁
冨田めぐみさん（NPO法人赤ちゃんからのアートフレンドシップ協会代表理事）を講師に迎え、乳幼児と保護者を対象に「あかちゃん鑑賞会」を開催。発達に応じた鑑賞のヒントや美術館の楽しみかたを紹介すると「子どもの反応をキャッチすることで、大人がかえって興味を持てた」（０、２歳児の母）、「疑問だったあかちゃんの行動が理解できた」（０歳児の父）などのうれしい感想をいただく。

12月5日（月）☀
「ピエゾグラフによる『窓ぎわのトットちゃん』展」に、当時の小学校の机や椅子、オルガン、ランドセルや文房具など懐かしい品々を展示する。会期中にはここで「海のものと山のもの」のお弁当ごっこも開催。トットちゃんの世界をぜひ楽しんでもらいたい。

12月15日（木）☀
５月に参加したAFCCアジア児童コンテンツフェスティバル（シンガポール）が縁で、事務局の方がシンガポールでアートやデザインを学ぶ学生23名を伴ってご来館。

12月22日（木）☁
開館40·20周年を記念し、ホームページをリニューアルすることに。本日は事業を委託する会社の担当者と３時間かけてじっくりと意見交換。2017年７月を乞うご期待。

2017年1月11日（水）☀
前庭に咲く越前水仙が豊かな香りで来館者をお迎え。2009年、ちひろゆかりの福井県から寄贈されて以来、花が少なくなるこの季節に可憐な彩りを添えてくれている。

窓

「核なき世界へ　希望の実現」

竹迫祐子（公財）いわさきちひろ記念事業団事務局長

昨年12月23日の国連総会で「核兵器禁止条約に向けた交渉を2017年に開始するよう求める決議案」が採決されました。これは、メキシコやオーストリアなど核兵器を持たない56か国が、10月の国連総会第一委員会（軍縮）に提案し、賛成123か国、反対38か国、棄権16か国で採択されて総会に上がったものです。

日本は、この提案に同委員会でも総会でも反対をしましたが、日本の反対票には国内外で、「日本にはがっかりさせられた」という声が多く聞かれました。被爆国として、広島、長崎のヒバクシャを中心に核廃絶運動の先頭に立ってきた日本が、なぜ「核兵器禁止条約に向けた交渉開始」という動きに賛成しないのか。本当に、恥ずかしい態度です。

同じ国連総会では、他方で、日本がアメリカなどとともに提案した「核兵器の全面的廃絶に向けた新たな決意の下での共同行動」の決議案が、賛成多数で採択されています。ふたつの決議案は、一見違いがよくわかりませんが、要は核を持つ国やその傘下で守られていると自認する国にとって、前者は都合が悪いということでしょう。

故·井上ひさしさんは、生前、核兵器の北半球の偏在に触れ、「非核兵器地帯は、東南アジア、アフリカに拡がっている」。さらに冷戦下で非核に関する条約が成立していた「ラテンアメリカ、南太平洋を加えるなら、南極を含む南半球全体が非核兵器地帯という光明に照らされている」とし、「断乎たる南半球諸国の行動は北半球へも好ましい影響を及ぼして、いまでは大気圏外の宇宙も、海底も非核兵器地帯になっている」と語りました。壮大で希望にあふれた話と思っていましたが、今回のメキシコ、オーストリア、エジプト、南アフリカや中南米、東南アジアの国々からの具体行動とその検証を、という決議案は、絵空事でない希望の実現を見る思いです。

INFORMATION

●次回展示予定　2017年5月19日(金)～8月20日(日)〈開館40周年記念Ⅱ〉

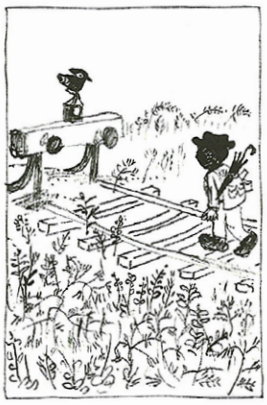
〈企画展〉高畑勲がつくるちひろ展
ようこそ！ちひろの絵のなかへ

いわさきちひろ　帽子の少女　1970年

古今東西の美術や文学に通じ、アニメーションづくりの第一線で活躍してきた高畑勲は、ちひろを「子どもの尊厳をとらえた稀有な画家」と評し、その作品から創作のインスピレーションを得てきたといいます。高畑の審美眼を通して、ちひろの絵の魅力を新発見し、これまでにない演出でちひろの絵の世界を‘体感’していただきます。

〈企画展〉奈良美智がつくる
茂田井武展　夢の旅人

「茂田井武の美意識は生活のなかに息づき、それゆえ逆説的に崇高だ。彼の絵のなかには西洋も東洋もなく、ただ純粋な魂だけがある。」と語るアーティスト・奈良美智が、茂田井の展覧会をつくります。欧州放浪のなかで描いた画帳「Paris の破片」や絵物語「夢の絵本」など、時代を超えて奈良の心に響く、茂田井武の作品をご覧ください。



茂田井武　絵物語「夢の絵本」より　1948年

2017年展示予定

展覧会名、会期等は予告なく変更することがございます。

8月24日(木)～11月5日(日)　〈開館40周年記念Ⅲ〉
ちひろの詩(うた) ―絵は詩のように―／〈企画展〉奇喜怪快 井上洋介の絵本展

11月8日(水)～2018年1月31日(水)〈開館40周年記念Ⅳ〉
ちひろの歩み／〈企画展〉日本の絵本100年の歩み

ちひろ美術館・東京イベント予定 http://www.chihiro.jp/ https://www.facebook.com/chihiro.tokyo

各イベントの予約・お問合わせは、ちひろ美術館・東京イベント係へ。イベント参加費のほか、別途入館料が必要です(高校生以下は無料)。
※イベント申し込みは、先着順です。また、参加費が記載されていないイベントは無料です。TEL. 03-3995-0612 E-mail chihiro@gol.com

〈展示関連イベント〉

●イブ・スパング・オルセン展　ギャラリートーク

生前のオルセンと長らく交流のあった講師が、展覧会の見どころをお話しします。
○日　時：3月11日（土）14：00～15：00
○講　師：穂積保
（子どもの本WAVE代表）
○参加自由、無料

イブ・スパング・オルセン
『つきのぼうや』（福音館書店）より　1975年
© Ib Spang Olsen by Medialynx Japan

●講演会「北欧の子どもの本」

アンデルセンの生まれた国・デンマークを中心に、北欧の子どもの本の歴史や最新動向などをお話しします。
○日　時：4月15日（土）15：00～16：30
○講　師：福井信子(東海大学文学部北欧学科教授)
○定　員：60名
要申し込み　3月15日(水)受付開始
○参加費：700円

●3月～5月の開館情報

月曜休館（祝日は開館、翌平日休館。GWは無休）
臨時休館日：3／21（火）、4／12（水）、5／16（火）～5／18（木）

●わらべうたあそび

○日　時：4月1日（土）11：00～11：40
○講　師：服部雅子
（西東京市もぐらの会代表、はとさん文庫主宰）
○対　象：0～2歳までの乳幼児と保護者
○定　員：15組30名
要申し込み3月1日(水)受付開始

〈参加自由、無料のイベント〉

●松本猛ギャラリートーク

ちひろの息子である松本猛が、作品にまつわるエピソードなどをお話しします。
○日　時：3月12日（日）14：00～
○講　師：松本猛（絵本学会会長・ちひろ美術館常任顧問）

●ガーデントーク　ちひろの庭の花めぐり

「ちひろの庭」や展示室で、ちひろが愛した草花などのエピソードを紹介します。
○日　時：3月26日（日）14：00～14：30

●ギャラリートーク

毎月第1・3土曜日　14：00～

●えほんのじかん

毎月第2・4土曜日　11：00～

CONTENTS　ちひろと世界の絵本画家コレクション わたしのアンデルセン…❷／〈企画展〉デンマークの心 イブ・スパング・オルセンの絵本…❸
〈活動報告〉赤羽茂乃講演会／支援会員の日　海老名香葉子記念講演…❹
ひとことふたことみこと／美術館日記／窓「核なき世界へ　希望の実現」…❺

美術館だより　No.196　2017年2月20日

ちひろ美術館・東京
〒177-0042　東京都練馬区下石神井4-7-2　テレホンガイド03-3995-3001 TEL.03-3995-0612 Fax 03-3995-0680